

1. はじめに

新型コロナウイルスの影響で本校の文化祭も完全な形での実施は中止になってしまった。本来ならば、来場者の方と対面して生物研究部の活動の成果を直接伝えたかったのだが、こうしてオンラインでも本部活の部誌を閲覧していただいていることに感謝を申し上げる。また、その影響で私が計画していた実験も残念なことに頓挫してしまったので、今回は、休校期間中にたまたま自宅の本棚から手に取った本を読み、私を感じたことを書き述べたい。自粛ムードが続き、社会にも疲弊感が漂い始めている頃、私に少しばかり活力を与えてくれたその本は世界の宗教に関する本なのだが、以下はその内の仏教についての話である。生物には直接関係はないので読み飛ばしていただいても構わない。

2. ブッダの教え

ブッダは人が苦しみを感じる時、その人は物事の真理を知らず、煩悩を抱え何かに執着していると考え、ありのままの世界を知り、自我への拘りもなくすほどに自己を見つめることで苦悩から解放されると説いた。だが、果たしてこの方法は俗世を生きる現代の我々にとっても有効であろうか。私たちは自己を取り巻く環境に居心地のよさを感じるときはその場所に留まろうとする。一方で居づらく感じるときや更なる高みを目指したいときはその場所から離れようとする。その際に私たちは留まらせないとする、離れさせないとするあらゆる外的要因によって苦しみを感じるだろう。ではその苦しみを取り除くべくブッダの教え通りに、留まる、離れるという欲望を捨てたとしよう。ここで私たちは、苦悩から逃れようとした結果、本来の自分の意思とは相反する状態に陥ってしまうことに気付く。意思は煩悩の一種なのだから当然なのかもしれない。つまり、ブッダの教えは私たちに後退も維持も前進も許していない。なんらかの“状態”にあることも許していないと思えた。ブッダの方法は私たちが生きる世界とは十分に離れた別次元の世界でこそ完全に有効なものとなると考えた。

3. 現代人の苦しみ

私たちはどうして苦しみを感じながらもこの俗世で生き続けているのだろうか。出家はなかなかできるものではないから、と言う回答はここでは不適である。もしも人にとって苦しみの多くが絶対的なものであり持続性を持つものであるとすれば、この世は今の状態を保つことはで

きていないだろう。日常生活においても各々になにがしかの苦悩を抱えている人—テストで悪い点数をとってしまって苦しみを抱える人、友達と喧嘩をしてしまったことに苦しむ人、仕事があまくなくて苦しむ人—が存在する。では人々はその苦しみから完全に脱しようとするか。いや、その人々は苦しみを超え、奮起して勉強や仕事をしたり、喧嘩相手と仲良くなったりするだろう。これは決して苦しみを美化しているのではない。ブッダが教えを説いた時代は紀元前で、カースト制度も敷かれており下層の人々は目に余る酷い生活を強いられていた。彼らの苦しみは絶対的で継続的なものだったのだろう。彼らには苦しみを捨てる以外にそれから逃れる方法はなかった。しかし、私たちの世界、少なくともこの日本では、人々が受容する苦は大抵の場合において、相対的で一過的なものである。当然、今の私たちは完全に自由な身である。自由意思的に物事に執着を行う。そして執着を続ける上では苦しみが発生することも知っているので、苦しみを全くに放棄しようともせずこの俗世で生き続けられるのだ。

ではブッダの思想から何を学ぶことができるだろうか。上に書いた苦しみは生温い苦しみと言える。実に、自分が絶対的で継続的な苦しみを患い、その苦しみを生み出している執着が自らは望んでいないとき、ブッダの教えを受け入れて自己を見つめその固執を捨てることで苦悩からは解放されるだろう。ここでは“自分が意図していない執着に捕らわれている”ことを観察することによって自覚したのである。ブッダの教えを完全に呑むことは今の私たちには難しい。部分的であっても、本当に辛いと感じたときに仏教に依拠することは許されるだろう。

4. ブッダの教えの私流の活用法

私はまだ17年しか生きておらず、自由意志(科学用語では無い)に依らない絶対的な苦しみというものを味わったことがない。とは言うものの、自己を観察したことがないと言うのは嘘である。簡単な例え話を挙げよう。数年前、文化祭の準備期間で朝の集合時間を指定しているのにも関わらず、多くの部員が時間に遅れて登校してくるとき。理性が働かなければ私は、自分はこんなに一生懸命やっているのになぜ言うことを聞かないのかとその部員に対して一種の憎悪を抱くかもしれない。しかし、ここで自分を俯瞰してみると、私は文化祭を成功させなければならず、遅刻は許されないという単なる自己の自由意志的な執着に捕らわれていたことに気付いた。もはや、憎悪という苦しみは一切感じることもなく、灘校生が時間通りに来るなんて期待していた自分が滑稽に思えたのであ

る。仏教が自己を観察することに置いた意味とは少し離れてしまうが、客観視することで私の肩は確かに軽くなったのだ。

5. 最後に

ブッダの教えには一部、仏教徒でなくても無意識的に日々実行しているものもあるだろう。自己を観察する行為は、環境的に強いられていると思っていた執着が本当は自由なる執着であることを教えてくれた。俗世に生きる私たちは執着を捨てることは不可能だが、その執着が思っているよりもちっぽけであるという事実は知ることができる。社会に不穏な雰囲気立ち込めている今だからこそ、一度、新型コロナウイルス関連の報道や SNS を遮断して自分を俯瞰してみてもうだろうか。必ずしも私と同じとは限らない形で、少しは気持ちを楽しめることができるだろう。もっとも、この文章が公開されている時には、感染症の勢いも下火になっていることが一番であるのだが。